



上智大学短期大学部

SOPHIA UNIVERSITY JUNIOR COLLEGE DIVISION

上智大学短期大学部における私立大学等改革総合支援事業を中心とする私学助成を基盤とした取組と成果

学校法人上智学院

高等教育機関

上智大学 上智大学短期大学部

上智社会福祉専門学校

2016年
法人合併

中等教育機関

栄光学園
中学・高校

六甲学院
中学・高校

広島学院
中学・高校

上智福岡
中学・高校

大学名 上智大学短期大学部

設置者 学校法人上智学院

開学 1973年4月1日 (2012年4月1日上智短期大学より名称変更)

所在地 神奈川県秦野市上大槻山王台999

学科 英語科

学位 短期大学士 (英語)

教育の精神 「他者のために、他者とともに」 (Men and Women for Others, with Others)

教育の目的と特徴
○キリスト教ヒューマニズムのもと人間形成 ○自己発信力に重点を置いた実用的かつ学術的英語力の育成 ○幅広い教養教育 ○専門的知識の修得と自律した学修者の育成 ○多文化共生社会実現に向けた実践 (サービラーニング活動として外国籍市民への日本語・教科支援) ○地域の国際化への貢献 (サービラーニング活動として秦野市立小学校での児童英語教育活動)
*サービラーニング活動は2008年学生支援GP採択

定員 収容定員 500名 (入学定員250名)

在学生数 547名 *所在地・近県以外出身の学生約50%

私立大学等改革総合支援事業採択状況
タイプ1 教育の質的転換 (2012~2017年度)
タイプ4 グローバル化 (2016年度・2017年度)

教育の質的転換 取組

改革総合支援事業で求められる視点は、国の高等教育政策を踏まえ、具体的な大学改革に取り組む示唆となり、大学の重点目標に新たな広がりを持たせている。

取組の例

- ① 3つの方針(ポリシー)を踏まえた秦野市の参画の点検・評価
学長を中心とした教学マネジメント体制
IR推進室設置
- ② 教職員のSD
- ③ シラバスコントロール
- ④ 授業評価の活用
- ⑤ 教員評価制度の導入
全専任教員参加のFD活動
- ⑥ アクティブラーニング
アドバイザー制度
GPAの導入
- ⑦ 学修成果の測定
高大接続
- ⑧ 入試改革

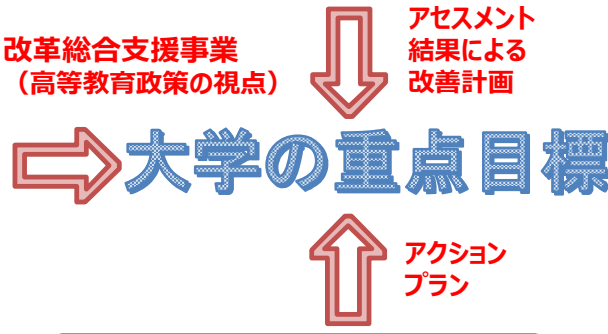
特徴的な取組をクローズアップ①～⑧

① 3つの方針(ポリシー) 2012年制定、2017年改正
A.卒業認定・学位授与の方針(DP)
B.教育課程編成・実施の方針(CP)
C.入学者受入れの方針(AP)

+

4つのアセスメントポリシーに基づく査定のためのデータ収集、分析、改善方法を確立。結果について秦野市から外部評価

② 全教職員がSD等により、アセスメント結果によるミッションを共有



上智学院の将来構想
「グランド・レイアウト2.0」

- ③ シラバスコントロール
・授業概要、授業計画、達成目標、到達目標、評価方法、評価基準、準備学修等をCP,DPに照らし合わせ修正指示
- ④ 授業評価の活用(顕彰・改善・FD活性化)
・授業評価へのフィードバック報告を通じた、教員による学修成果の把握と教育改善
・グッドティーチング賞授与・FD活動のテーマ
・評価結果の公表・授業観察とピアサポート、授業改善指示
- ⑤ 上智学院教員評価制度導入
・2016年度より実施。教育活動推進手当支給
- ⑥ アクティブラーニングと地域の課題解決
・学内での学びであるサービスラーニング科目(児童英語教育演習、日本語教育演習等)と学外での学びである教育ボランティア活動は、アクティブラーニング実践の場
- ⑦ 学修成果の測定とその指標
・英語力(TOEIC-IPやGPAの量的評価)
・専門力(ゼミ論文の水準のルーブリックを活用した質的評価)
・DPに掲げる能力獲得の自己評価(量的評価)
・学修ポートフォリオを活用したDP到達度及び学修成果の把握と、教員によるアドバイジング(質的評価)等による自律支援
- ⑧ 入試全種別で学力の三要素による測定導入
APで、入試種別ごとの目的、求める学生像を定め、学力の三要素と関連した能力、考查方法で入学選考。2019年度一般入試C日程で主体性をもった協働性をディスカッションで測定。

教育の質的転換 変化と成果

改革総合支援事業の視点を踏まえ、学長を中心とした教学マネジメントにより、教育改革を推進

英語力の学修成果

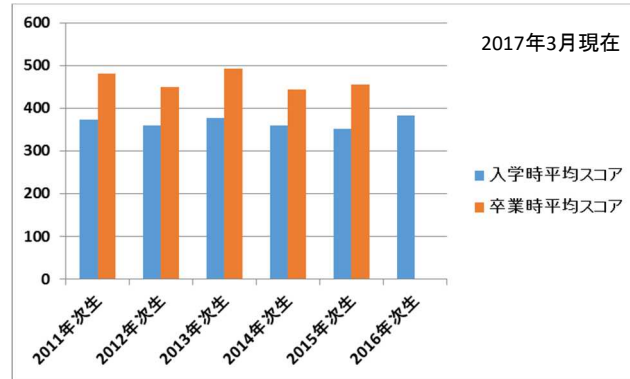
<英語力養成のシステム>

コンテンツベースで英語発信力を鍛える英語必修科目「英語 I ～ IV」【レベル別クラス編成】
 + 選択必修科目「基礎・標準・上級英語スキルズ科目」（スキル別・テーマ別）
 海外短期語学講座（英・豪）等
<授業外学修支援>
 英語学修支援プログラム、e-learning等

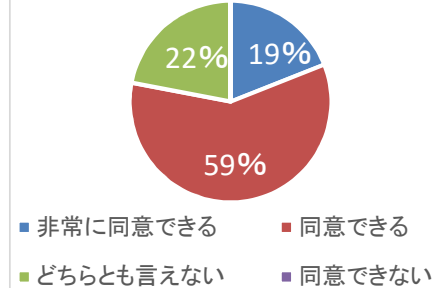


<2013年度以降の学生の成長視点に立った英語教育改革>

- 2013年度** 英語必修科目に「TOEIC対策講座 I・II（1年次）」を導入。半年で80点スコアアップの学生に成績評価ポイント。英語選択必修科目に標準・上級「TOEIC実践演習講座」を導入（2年次）
- 2014年度** TOEICに特化したe-learning導入
- 2015年度** 英語補習クラス「英語ファンダメンタルズ」開講
学生総合支援センター学修支援部門設置（学修支援チューターによる指導）
- 2017年度** 選択必修英語スキルズ科目に準上級クラス設置
- 2018年度** 選択必修科目に「TOEIC（スピーキング・ライティング対策）」開講予定



2015年次生卒業時の自己評価
 「英語学修を通して4技能を総合的に運用できた」



左記施策により、年度で伸び率にバラツキがあるものの、着実に英語力を上げている（グラフ左）。2015年次生の学生の卒業時自己評価においては、「英語学修を通して英語4技能を総合的に運用できた」の問いに「非常に同意できる」「同意できる」と答えた者が合わせて78%に上り（グラフ右）、また本学の英語教育の目標としている英語自己発信力の獲得については79%が肯定的に考えている。高い伸び率、スコア保持者がいる一方、伸び率が49点以下の学生が一定数おり、全体の平均伸び率向上のためには、英語力の底上げが課題である。また、全体的にリスニングに比べ、リーディングが弱い傾向にあり、これを強化する必要がある。大学のこの分析に対し、リーディング力がついたと自己評価している学生が84%にも上り、他方、TOEICスコアへの満足度が60%であることから、実力はついてきているものの、伸びしろをまだ感じている学生が多いと考える。これに応える教育プログラムの構築をさらに目指す。

専門力の学修成果

◆2016年度よりゼミ論文作成を必修化

- (1) 先行研究（教養・基礎・専門科目など）
- (2) 各学生が関心のあるテーマについてゼミナールで議論し深める
- (3) テーマ研究を深化させゼミ論文にまとめる。

2016年度アセスメントにおいて、其々のゼミナールの各水準における代表的な論文にループバックを活用した質的評価を加え、次年度以降の指導に反映。また、主なゼミ論文タイトルを公開。本学の学びの集大成について可視化。

2017年3月卒の2015年次生の卒業認定・学位授与方針に掲げる学修成果獲得の自己評価

回答者数 192名（卒業生206名） 回収率93.2%

	①人のためにすすんでできた	②人に言われなくてもできた	③人に言われてできた	④意思はあったができなかった	⑤できなかった	⑥無効	①②③できた合計
1.キリスト教ヒューマニズムに共鳴し、他者愛を実感できた。	42	75	54	11	3	7	171 (89%)
2.グローバルな事象に関心をもち行動する地球市民としての人格形成ができた。	54	82	41	7	1	7	177 (92%)
3.幅広い専門知識を探索する意欲を持ち、分野を超えて学びを実践することができた。	53	83	43	5	1	7	179 (93%)
4.英語を実践的に運用し、母語やその他の言語力も磨き、他者とのコミュニケーションができた。	49	77	44	13	2	7	170 (89%)
5.英語圏と日本の文化を比較検証し、多様性から価値を見出すことができた。	54	80	46	4	1	7	180 (94%)
6.グローバルな視点で社会を理解し、多文化共生の理念を実現できた。	57	78	45	4	1	7	180 (94%)

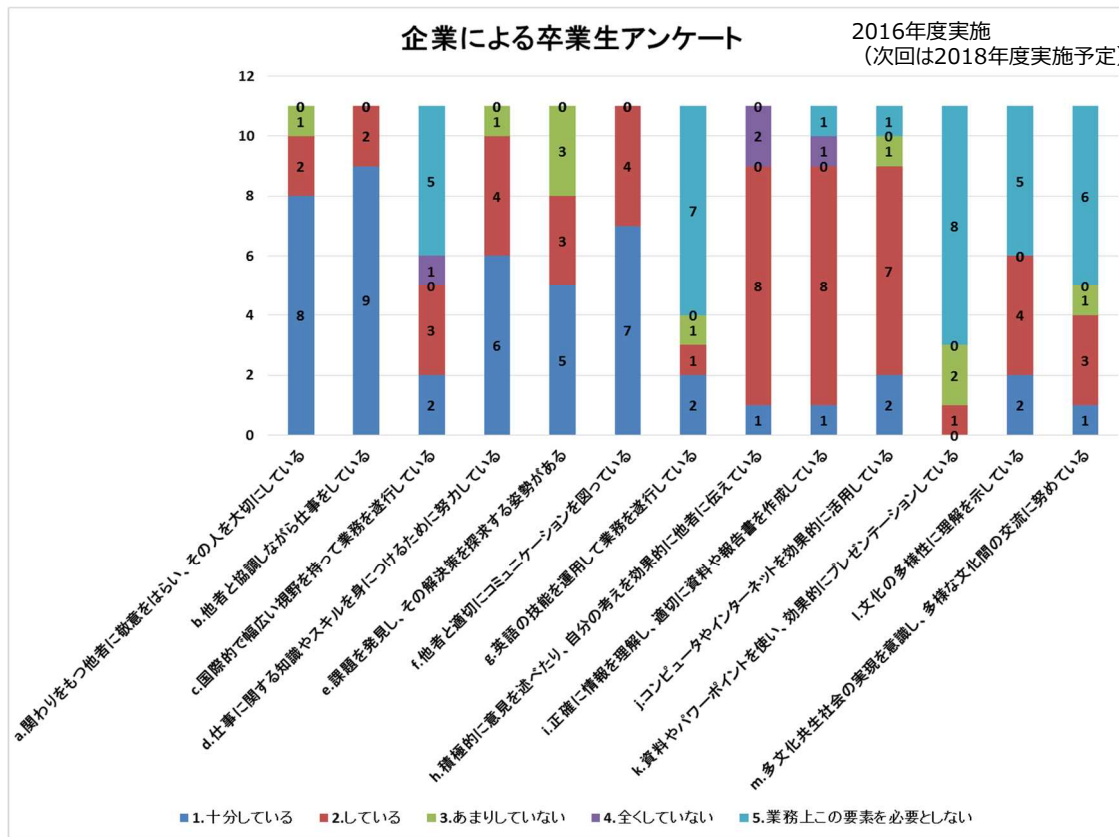
* 2017年度4月1日改正以前の卒業認定・学位授与方針6項目に回答
 * 2014年次生にあった「どちらとも言えない」の選択肢を廃止。より明確な自己評価にシフト

社会からの評価と期待

改革総合支援事業における高等教育政策の視点から、様々な大学改革を実践してきたことは、学生を成長させ、本学が卒業認定・学位授与の方針に掲げる能力・態度を身に着けた卒業生を送り出し、社会での活躍が企業へのアンケート調査から検証できる。

アンケート調査により、卒業認定・学位授与の方針に掲げる能力・態度を身に着けた卒業生が、学修成果を活用し、どのように社会で活躍しているかを測定するほか、卒業生を通して見える本学の社会的役割と使命、並びに社会が本学に期待しているニーズを把握し、それを教育課程等に反映させ、教育活動全般の改善を図る。

以下卒業生の主な就職先30社に対して行ったアンケート結果で、11社からの回答を示したものである。全般的に発揮している能力・態度において ■ 1.十分している ■ 2.している との肯定的評価が高い。



概ね本学の卒業生は社会から高い評価を得て活躍していることが分かるが、回答の中から、若干評価の低かった項目や、各企業が業務を遂行するうえで掲げている求める能力を踏まえ、総合的に判断し、以下の5つの力を今後より一層高めることが本学に期待された社会的使命の一つであると考え、教育課程、学生生活、社会貢献等の教育活動に一層落とし込んでいきたい。

1. 自分の意見をまとめあげ、分かりやすく説明する能力
2. 課題を発見し、その解決策を探求する姿勢
3. グローバル化に対応できる英語力
4. 困難にぶつかっても乗り越えることのできる忍耐力と強い責任感
5. 社会的マナーと高いモラルを備えたホスピタリティマインド